

母の言葉、父の言葉

横浜市 瑠璃奈

わたしの母の言葉は、「何事も自分に返ってくるから、人に接するときはそれを忘れないようにしなさい。」です。

い、というところでしょうか。当然例外もあるでしょうが、確かにと思いました。広い心、広い器が必要ですね。

おかえり

藤沢市 板橋 健太郎

相手に対しての自分の行いは、やがて自分に返ってくるので、相手に失礼な事をしてはいけない、との事でした。

わたしは父の言葉は、「信頼・信用は半分まで」です。それは相手に100%依存してしまつと、その相手との関係で何かあれば自分もダメになってしまうからだというのです。

過度の期待は相手にとつた。

『おかえり。元気そうやね。』

家に入ると、料理中の母から声をかけられた。

他の用事もあったため、

半日弱の短い滞在であったが、両親からは近況報告が続いた。『近所さんの話や万博がどうだったという話。そして、大部分は、どこに通院していて、最近ど



テーマ投稿

「母の言葉、

父の言葉」

えです。

切り離されても何とかなら、くらの関係が適度な距離感とのことですね。

これは意識していかないとなかなか難しいので、本

当に仲良くなつていくときには意識して気を付けるようにはしています。

相手の負担にもなりたく

ないので。

母の言葉も父の言葉も実践していくには、自分がい

ろんな面で強くななくてはならないと思います。

心も身体も、です。日々1mmでもいいので、

前進し自己研磨を忘れないように頑張つてまいります。

母の言葉

藤沢市 幸田

私が29歳の時の突然の母の急逝に、当時は何が起こったのかよく受け入れられませんでした。10年たった今、ようやく向き合えるような気がします。母は色々なところで衝突をしていました。とても真面目でズルができず、戦いを恐れない人で小学校教諭であり、生徒・同僚・上司・教育委員会と常に闘っていました。

母は、30代半ばから精神疾患を患い、私たちが思春期にさしかかる頃には、母親としての役割はもう果たせなくなっていました。

結果的に仕事まで失い、そんな母はどこか、寂しそうでした。生来仕事人間でしたから。優しい思い出は5%くらいで基本的には、激しい感情にまかせた辛辣な言葉や嫌味、皮肉で時に荒くれながら、ほとんど祖母に育ててもらいました。

しかしいざ、自分が仕事をするようになると、母が何に立ち向かい、どんな悔しさを感じていたのかを少しだけわかる気がして、母の孤独は理解してあげられなかったのだと思います。

母の仕事部屋の壁には手作りポスターがありました。おそらく学級担任時に作ったもので「あおいくさ」と縦に、以下の頭文字でできています。

あせるな
おこるな
いばるな
くさるな
さぼるな。

生きていると、僕だけでしょうか。時に自分と周りを勝手に比べて劣等感に苛まれ、呼吸できないような苦しさを覚える事があります。頻度は減りましたが、大学に受かっていない夢や国家試験勉強の夢を見ることも未だにあります。目が覚めてホッと安堵し、自分の成長は自分のスピードでしかできない、と言いつつ聞かせています。

直接母に言われた事はないけれど、この中でも特に、あせるな、くさるな、さぼるな、はふとわたしの中で思い出す、亡き母の言葉となっています。



正々堂々

横浜市金沢区 関口 武三郎

昭和50年4月、海に浮かぶヨットの美しさに魅せら

れて金沢八景に開業して50年が過ぎた。新潟の山村で育った私にとって、海の見

える町は子供のころからのあこがれだった。昭和44年

日本大学歯学部を卒業して、神奈川県立大学口腔外

科教室に入局して以来、ずっと金沢八景の海と共に暮らしている。

私の父は、私が大学を卒業した年の6月に亡くなった。海を見る機会の少な

かった父に、金沢八景の美しい景色を見ることが出

来なかったことが今でも、私にも分かり易く、今でも



人生訓として私の生き方を支えている。またそれは、父自身の生きざまでもあった。終戦時、村長をしていた父は公職追放となつたが、その後も教育委員会や町村合併などで村民のために奔走し、まさに滅私奉公の短い生涯であった。応援する国会議員に陳情のため、上京した折には、当時大学生だった私も何回か同席したことがあるが、ど

じけそうになる自分を支えて

